戦場の野良犬達

天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
戦場の野良犬達

【Ｎコード】
Ｎ８０７２Ｘ

【作者名】
天使

【あらすじ】

時は西暦２１７５年

２１７０年に、第三次世界大戦が勃発。
原型を努めていない世界で、戦争という名の混沌を消すために、平和を取り戻すために、今、不器用な野良犬たちが立ち上がる…

第一話　プロローグ（前書き）

駄文ですが、お付き合いいただけるならば幸いでございます

第一話　プロローグ

あなたは何のために戦いますか？

祖国のため？平和のため？家族のため？出世のため？笑顔のため？

これは、戦いでしか自分たちを証明できない不器用な一戦士達（男たち）の物語である。

信じられるのは、仲間

その仲間と笑い、泣き、楽しみ、勝つ

そういう男たちの…そういう野良犬たちの…物語である…

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

時は、西暦２０７６年

世界は、金、言葉、権力など無意味な、武力の…戦争の時代へと足を進めていた

２０７０年、第三次世界大戦勃発

今回の大戦もまた、小さな弾丸一発によって始まったのだ

その事件により戦争の再開。世界各国で争いは広がり、争いが争いを呼ぶ、阿鼻叫喚な状態へと陥った。
武力に長けている国によるじゅうたん爆撃によるダメージは、留まることを知ることはなく、どこに何の国があったのかは、もう誰も知ることはできない。

そんな地獄を生き残ろうと、また、緑の大地で走り回り平和な世を取り戻したいと願うものもいたが、今ではもう数えられるぐらいの少数なものとなってしまった。今の世界は、国の侵略などではなく、ただの殺戮を、戦争を、相手を殺すことを楽しんでいるからだ。
そんな状況で平和を取り戻したと叫ぶ何人かが現れたが、一週間ともたずに壊滅

また戦争が続くのだ

そんな中、また一人
平和を取り戻そうと考えている若者が現れるのだ。後に彼は、いや
彼らは…後の時代に語り継がれていくのだろう

元、北アメリカ大陸　北部

力をもたない人々が集まる住人街の大通りを、轟音を立てながら装甲トラックが道を造るように前進していた。

中には、12，3人の男たちが腰を掛けていた。
全員が全員、身を武装して片手には銃器を持って談笑や銃の自慢などをしている。

こいつらは全員、戦場で捨て駒として扱われるだけの元一般人だらけだ。誰もが、この世の中を良いことに人を撃ってみたい、戦場へ行ってみたいと思う阿呆な輩が増えるのだ

そんな中、ひとりの黒人男性が長椅子の端に座るまだ若い男に話しかけた。
「よう若いの。お前もこれからどっかの誰かさん目掛けて銃をぶっぱなしに行くのかい？」
黒人の男はニヤけながら若い男に絡んでいた。
「いやぁ、いい時代になったもんだぜぇ。俺ら一般人でも、こうやって実弾を使って戦うことができるんだからよ？」

自分の銃を見せつけるように叩き、
「俺、前は自動車整備工場で働いてたんだぜ？そんな俺がってわけよ。前々からこんな銃を野郎のケツにお見舞いしてやりたかったんだよ」
ハッハッと笑いながら喋り続ける黒人に対して、話を聞いていただけの若い男は、突然立ち上がり、黒人を睨みつけ、言い放った

「おい貴様。今回が初の戦場か？」

男の言葉に戸惑いながらも、黒人の男は「あ、あぁ…」とだけ返事をした。

「だったら言わせてもらうぞ。戦場を甘く見るな。
あの地に降り立った瞬間、楽しみながらなどと思っていると即座に死ぬぞ。
遊び半分で戦争に参加されても足でまといで邪魔になるだけだ！」
気づけば、黒人の男の他、乗車している男たち全員が注目していた
「銃を撃ちたいだけだと言うのなら、どっかそこらへんで死体に群がってるカラスでも撃ってろ。実戦経験のない奴ならその死体でも構わないだろうな」

その場でワイワイと喋っていた男たちは、一瞬にして静まりかえってしまった

そのまま若い男はまた腰掛けると、俯きながら一定の呼吸を繰り返していた

元アメリカ第七地区

そこに先程の輸送トラックは止まり、全員がゾロゾロと降りていった

その中の若い男も、早々に降りると、放送マイクらしきものが置いてあるテントまで歩いて行き、荷物を置いてあったテーブルの上に置いた

「おい、そこのメガネ。ここの指揮官を呼べ」

イスに腰掛けていたメガネの男は、若い男を一瞥すると、眉間にシワを寄せながら聞いた

「あんた……名前は？」

「アレン」

若い男、アレンはそう言った

「アレン・ノイシュ少尉だ、そう伝えろ」

この男の存在によって、このあとの世は大きく変わっていくのだ。
決して表舞台には立たないが、確かな成績を残していく、野良犬だ

第二話　別れと出会い

別れ　この時代の別れはそこらの別れとは違うものだ
上の命に従うのが兵隊なのだ

三人集まれば文殊の知恵
人は多いほうがいいのだろう
だが無能が何人集まろうが無能は無能。０に何をかけても０なのだ
少数の、確かな実力をもった男たち、彼らは少ない人数で戦場を駆け回った

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーー

「曹長、君は今日をもってこの部隊から別に行ってもらうよ」

約一週間前、アレンは元いた別の部隊、アストに所属していた。加えてこの時点ではまだ曹長だったのだ

そして、今アレンにしゃべっているのはその部隊の最高責任者、フレムベル大佐だ

その言葉にアレンは返した

「……俺が…邪魔だからですか？大佐」

アレンが鋭い眼光で大佐を直視する。…少なくとも上司を見る目ではない

大佐は鼻で少し笑うと、微笑を浮かべながら

「いやすまん、そういうつもりではなかったんだがな…？

君の実力は他の部隊にも少しは知れていてね…この前の軍略会議で別部隊のナオキ少佐から君が欲しいと言ってきたんだ…」

聞き難さのない、とても男には出せない綺麗な透き通る声が聞こえる。周りで輸送トラックや、たまに戦車が通るというのに、大佐との会話は周りの時間が止まっているかのような錯覚に陥られる

「もちろん、最初は断ったよ。君は僕も認める実力者の一人だからね、それに僕のお気に入りだ」

爽やかな笑顔を向けられる。不覚にも一瞬見惚れてしまったことを

考えると、この人はやはり他の人とは違う何かをもっていることを肌で感じさせてくれた

「だが、彼は一ナオキ少佐は昔からのよしみでね、よく互いに世話になっている。だから断りづらくてね…」

微苦笑を浮かべるだけでも、アレンにはすまないと謝罪をしていることがよくわかった。それほど二人の仲も長いのだ

「というわけでアレン曹長、君は今日をもってこの部隊を脱隊、ナオキ少佐が率いる部隊に転属してもらう。…よろしいかい？」

最後まで申し訳なさそうに聞いてくる大佐はある意味意地悪すぎる

アレンは、一息つき

「ええ、わかりました大佐。大佐がそこまで申し、それを望むというのでしたら私は反論せずに承諾しましょう」

「ありがとうアレン。君はやはり僕が認める隊員、いや人物だ」

……この時代での部隊の転属は稀にみられるものであり、一生のうちにあるかないかで終わる

結果、脱退、転属は今生の別れといっても過言ではないのだ

大佐もそれを理解している。だからあまり気乗りしなければ、内心アレンが断ることも期待していたのだろう

・・・・・・・

アレンは、大佐の涙腺が崩れかけていることに気づく。この人は涙もろく、感情的だ
だからこそ大佐になれるのだろう。兵の一人ひとりの戦士になみだを流し、焼け野原な戦場を見て涙をこぼす。そういう人なのだ

アレンもそんな彼だからここにいるのだ。そんな彼が上司として好きだからこの部隊に所属しているのだ。だから…

アレン、と名前だけで呼ばれたことに感激していた

「大佐、お世話になりました」

「良い結果を残したまえ、君にはそれができる」

笑みを浮かべながら見送り、アレンは踵を返し歩いて行く

「大佐！」

なにごとかと顔をあげた大佐にアレンは言う。大佐とともに、実現したかった夢のことを

「緑の大地で会いましょう！」

その言葉とともに敬礼をすると、大佐は、遠くわからないが、小さく微笑んでくれた。その笑顔には、期待の眼を付け加えて

これがアレン・ノイシュ曹長が別部隊に所属する理由である

これしきのことで階位が上がったりはしないが、そこは大佐だからであろう

これを期に、アレン・ノイシュ曹長は、少尉になったのだ

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――

「お待たせいたしました、アレン・ノイシュ少尉ですね。
奥のテントに向かってください。ナオキ少佐がお待ちです」

装備を抱え、奥の他とは違う大きさのテントへと入った

「失礼します。アレン・ノイシュ少尉です」

と、入った瞬間、アレンは驚愕した

少佐が殺されていた、いやそれより驚いた…かもしれない

アレンが見たものは

部下につっこみをされた少佐の姿であった

（…入る場所を間違えたのか…俺は？）

そう思い踵を返そうとしたところで、

「おや、君がアレン・ノイシュ少尉かね？」

どうやら本当につっこみをいれられてたのがナオキ少佐のようだ

「え？少尉さんもう来たの！？」

「わ、わわ！早くトランプ片づけて！」

「お前が片づけろ…」

「あ、あぁー！少尉殿！！うしろぉ！！」

そう言われて振り返るアレン

その隙に、

「いまだ！片づけろ！！」

「早く早く！！何やってんの！上から二段目の引き出しだよ！」

「ええい！どこでもいいだろうに！！」

くるりと振り返ったアレンが見たのは、息が切れるのを必死で抑えようとしている兵たちだった

（…こいつらの部隊にはなりたくない……）

「あ、あぁアレン少尉」

ナオキ少佐が申し訳なさそうな態度で近寄ってきた

「なんでしょう？」

聞き返すと、肩にポンと手を置かれ

「君にはこの部隊の小隊長をやってもらいたい。よろしいかな？」

（……大佐…）

アレンは、自分で顔が引きつっているのがわかっていた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8072x/

戦場の野良犬達

2011年12月13日06時45分発行